ちゃいるどネット大阪・
マッセ OSAKA 共催講座

マッセ・セミナー（中部ブロック）

■ 開催日　2010 年 6 月 23 日（水）
■ 会　場　さやかホール　2 階大会議室

子どもが『育つ』とは？

中京大学心理学部　教授
鯨岡　峻 氏

１．はじめに

１－１．保育・教育をめぐる混乱

ここには、いろいろな立場の方がお集まりかと思います。といっても保育関係の人が多いのではないかと思いますが、今、子どもの保育・教育をめぐっては、わが国は大きく揺れ動いています。皆さん方も、この先どうなるのだろうということに関して、いろいろご心配かと思います。保育を巡って行政的な考え方の変化が大きく起こるかもしれません。そういう行政的な問題や制度・仕組みの問題は私の専門外ですので、それをここで議論することはできませんが、子どもが育てられる場面、つまり家庭での養育や保育所・幼稚園での子どもが保育される場面が今どうなっているのか、今日はそこに焦点化してお話をしたいと思います。もちろん、保育する人たちの数の問題やスペースの問題など、制度と複雑に絡んだ問題はあるわけですが、とにかく保育の中身の話をしてみたいと思っています。

皆さんは今、特に保育を実践されている方々は、とにかく保育が難しいということで日夜いろいろ悩んでおられるのではないかと思いますが、特にここ10年、子どもたちの育ちの様子がかなり困った状態になっています。昔から子育て・保育は難しかったわけですが、それでも、今から20～30年前は、そこそこの家庭で育てられてきた子どもが、いろいろあるにせよ保育の場にやってきて、そういう子どもを何とか保育していけばいいという状況でした。しかしながら、家庭での養育がかなり崩れてきていて、子どもの育ち、それも「あれができる」「これができる」の能力面の育ちではなく、心の面の育ちにかなり大きなばら

つきが生まれてきました。そこでの育てにくさを、皆さん、保育の現場で痛感されているのではないでしょうか。

集団生活の場は、子どもにとっても自分の思いどおりにいく場ではありません。優しい保育の先生がいて、素直な子どもたちがいれば、いつもそこには明るく楽しい保育が展開されるなどということはあり得ません。どんな時代でも、どんなに保育の先生が立派であっても、保育の場がめでたしめでたしで終わるような展開になるなどということはあり得ません。ですから、昔から保育というのは難しかったわけですが、今は昔に比べれば異常な形で家庭の養育のありようも、子どもの心の育ちもばらつきが大きくなってしまいました。そのことによって、保育する皆さんがいろいろ苦労するというのが現状ではないかと思います。

家庭での扱いを反映しているのか、保育所・幼稚園で情緒不安定な子ども、周りの子どもに対してとても乱暴な子ども、自分の思いどおりに振る舞う子どもがいるかと思えば、非常に引っ込み思案で、自分を前に出していけない子どももいて、そのばらつきがとても大きい。個性ですから、昔からある程度のばらつきはあったのですが、それを超えて、今は本当に子どもたちの心の育ちが大変だという感じがします。

そして、それは決して保育所・幼稚園時代だけの話ではなく、小学校に上がれば学級崩壊の問題や不登校の問題、中学校に上がれば非行の問題や不登校の問題、大学生になれば引きこもりの問題や大学不適応の問題など、幼いときから大人になるまでのプロセスで、悲鳴をあげている子どもたちや青年たちがとても多い感じがするのです。どうしてそうなってしまったのでしょうか。子どもの数が減って、かなり手厚く子育てされているように見えるのに、昔に比べて心の傷付いた青年たちがどんどん増えています。

皆さんもご存じのように、メディアでは、世界学力テストで少々点数が下がったからといって大騒ぎしています。そのことで、学力、学びの連続性、保幼小連携と、騒々しい議論がなされているわけですが、メディアに踊らされて、学力、学力と言っていていいのでしょうか。本当に問題にしなければならなかったのは、わずか何点か点数が下がり、順位が下がったということではなかったはずです。学力という点で言えば、人口の少ない国まで含めれば確かに順位は下がりましたが、人口の多い国で比較すれば、日本は依然としてトップです。それ

なのになぜ僅かの順位の低下をこれほどまでに大仰に騒ぐのか、私には全く理解できませんが、メディアがもっと真剣に取り上げ、われわれが本当に深刻に考えなければならなかったのは日本の小学生たちが世界一学習意欲に乏しいという現実です。どうしてこちらの方を問題にしないのでしょう。ここでも、成績という目に見える点数で示されるものには飛び付くけれども、意欲のように目に見えない心の問題には、ほおかむりしてしまう今のわが国の現状が端的に表れています。

成績の問題ではなく、勉強が嫌いという子どもを、どうしてこんなにたくさんつくってしまったのでしょう。もしかしたら、ここにお集まりの皆さんも、勉強が嫌いという思いで学校生活を通過してきた方々かもしれませんが、それは端的に教育の失敗です。教育が目指すのは、いい点数を取らせることではないはずです。勉強は面白いのだということを教えるのが教育です。勉強が面白いことが分かれば、それこそ大人になって「これを勉強してみよう」という気持ちになれば、いつでも勉強できるのです。しかし、勉強が嫌いという子どもをつくってしまったのではどうしようもない。どうしてここにもっとメディアは目を向けないのでしょうか。そして、なぜ、保育、教育にも携わる方々がそのことを深刻に受け止めないのでしょうか。日本の小学生が世界一学習意欲に乏しく勉強したくないと思っているという現実は、社会にも大きな責任はありますし、家庭にも責任はあります。しかし、保育所や幼稚園で保育を担っている皆さん方の、保育の進め方に責任はないでしょうか。それは学校だけの責任でしょうか。学校に一番責任があることは言うまでもありませんが、保育の皆さんに責任なしと言えるでしょうか。

さらに、中学生になると、自分に自信のない子どもの比率が世界一高く、我が国の60％の中学生が自分に自信がないと言います。2位の国でも17％なのに、なぜ日本の中学生たちはこうも突出して自分に自信が持てないのでしょうか。それは、自分に自信を持てるような、自分を肯定できるような保育、教育を受けてきていないからだと、私は率直に思います。そして、単に点数で評価され、偏差値で輪切りにされていくような環境の中に置かれ、成績のいい子だけが認められ評価される状況、そして成績がぱっとしない子どもは大人から冷たい目で見られるという状況が、中学生たちの自信のなさを生み出しているのではないでしょうか。

そういうことを考えていくと、小さいときに子どもを育てるとは一体どういうことなのか、そして、子どもが育つとはどういうことなのかが改めて問われます。恐らく、ここにお集まりの皆さんも、あれができて、これができて、集団生活が営めてというように、目に見えるところで子どもの育ちを考えておられる方が多いのではないかと思います。でも、それでよいのでしょうか。

子どもが育つというときの育ちの中身は、心の面が大きいと思います。自分に自信が持てる、自分の中にやってみようという意欲がある、周りの人を信頼できるという心がちゃんと宿るように育てられて育っているかが問題なのです。大人は、小学校に上がるためにこれができるようにとか、早く学力が身に付くように英語や漢字を教えるとか、頑張って次々にいろいろなことをやらせようとするけれども、それが本当に子どもの幸せにつながっているのかどうか。そこのところがしっかり考えられていません。そして、発達が早いことがいいことなのだという考え方がどんどん世間の中に広がって、保護者も早い発達を期待します。そして、保育所や幼稚園に「あれをさせてください」、「これをさせてください」と言います。それを受けて「あれをさせます」、「これをさせます」と言えば、保護者が喜ぶものですから、保育の現場も、目に見える力を付けさせましょうということになっていく。そういうところに、今の日本の、幼児も含めて青少年の育ちの混乱の温床があるように思うのです。

つまり、大人が望ましいと思うことをどんどんさせていけば、子どもは望ましく育ち、将来、幸せが待っているという、単純極まりない図式が描かれているわけですが、皆さんはそういう考え方にいつの間にか支配されて、とにかくいろいろなことをさせていけばいいのだ、とにかく集団の流れに乗れるようにしていけばいいのだという形で保育しているということはないでしょうか。これに対して私は今、特に保育の世界に向かって、そういう保育の流れを根本から変えなければいけないということを、強く主張しています。

昨年来、保育所保育指針も幼稚園教育要領も変わりました。その改訂に携わった委員の中には、「指針はこう変わったけれども、皆さん方は保育を一生懸命やっておられるから、皆さん方の保育を変える必要はありません。今までどおりでいいのです」などということをおっしゃった方がいると伺いましたが、私はとんでもない話だと思います。皆さん方の保育が変わらないことには、子どもたちの将来は暗いと思います。今の小学生、中学生を見ていて、真剣にそう

思います。今のまま、これをさせて、あれをさせて、「この力が付いたから良かったね」、「頑張ってこれをやろうね」、「できたね、よかったね」式の子育て、あるいは保育は、絶対に子どもの将来の幸せにつながりません。そして、発達の目安を常に意識して、この目安をクリアしたから私の保育は大丈夫なのだというのは、本当に大丈夫なのでしょうか。発達の目安は、単に行動面のできる・できないの目安であって、本当に心の問題がちゃんと保育者の視野に入っているでしょうか。心の問題をしっかり考えたところで、「今の保育でいいのだ」などと本当に言えるでしょうか。本日はそこのところを考えたいと思っています。

１－２.「育てる営み」を見直す

私は今、育てるという営みをもう一度根本的に見直してみたいと思っています。いま、「学びの連続性」などという格好のいいお題目を振り回す学者がいます。そのせいでしょうか、まるでプレスクールのように就学前から小学校でやることの前倒しを考え、こういうことやああいうことをさせておけば、小学校に上がってから適応がいいだろうなどと考える保育所や幼稚園がかなりあります。これは確かに一見分かりやすい考え方ですが、現実に合っているでしょうか。小さいときから、早期教育をしてきた子どもは、本当に早く小学校に適応して、大人になった後、本当に幸せになっているでしょうか。そこのチェックは誰がしたのでしょうか。早くから教育をスタートさせれば、その分、小学校に適応しやすいだろうというのは、まことしやかな議論で、一見なるほどと思えそうな考え方ですが、よくよく吟味してみると、私は根本的に間違っていると思います。

『保育・主体として育てる営み』という本をこの５月の末に出版しました。その本の中で私は、早期教育は決して子どもの幸せにつながらないし、早くいろいろな力を付けたということが本当に子どもにとって役に立つかどうかは大いに疑問だということを、かなり詳しく述べています。このあたりの議論に興味のある方は是非この本をお読みいただきたいと思います。早く始めた子どもが、遅くから始めた子どもを一生涯リードしていくというのであれば、私だって早期教育を主張します。つまり、早く教育を始めた方が勝ち、早くから始めた者に、後から始めた者はいつまでも追い付けないということであるなら、当

然、早期教育をした方がいいでしょう。確かに、小学校１年のところで見れば、早くから始めた子の方が、遅くから始めた子よりもできることは多いのは事実です。漢字も20個くらい書けるかもしれないし、英語もアルファベットが読めるかもしれない。そこだけ見るから「うちも早くからやっておけばよかった」となるわけです。その差が大人になるまで持ち越されて、遅くから始めた人がハンデを持つのであれば、私だって早期教育を主張します。でも、１年生のときのその差は、小学校３年生までにほとんどなくなってしまいます。追い付いてしまうのです。そのことをどう考えるかです。いろいろな人がいろいろなことを言いますが、もう少しきちんと考え、事実を確かめて、いろいろな動きをしていけばどうかと私は思っています。

そういう状況ですので、いま私は改めて、「育てる」とはどういうことなのかという根本の問題に立ち返る必要があると思っています。なぜなら、保育所や幼稚園が全くない時代、江戸時代、鎌倉時代にも子どもはいたし、子どもは育てられて育っていたはずだからです。幼稚園教育を受けなければ、あるいは保育所保育を受けなければ子どもは育たないのか、集団生活を経験しなければ子どもは大人になれないのかというと、そんなことはないはずです。では一体、大昔の子育てはどのように進められていたのでしょうか。そこにいったん立ち返って、もう一度育てるという営みの根本を考え直してみたときに、今の家庭での子育ても、保育所や幼稚園での保育も、人が人を育てる、子どもは育てられて育つという基本から随分離れてしまっているように見えます。発達の階段を早く上らせれば、その子の将来に幸せが待っているというような、20世紀に入ってから生まれてきた発達の考えに、皆さんも、世界の多くの人たちも、毒されてしまっている。そういう考えがなかったときに、今のような子育てや保育、教育が考えられていたでしょうか。

発達のものさしができ上がっていますから、何歳になるとこういうことができるというのが一つの目安になります。この目安は確かにわれわれ発達心理学者が作り出したものですが、これはもともと平均的な子どもの育ちの結果をまとめたものです。つまり、その目安に到達する子どもは半分で、半分は届かないということです。平均の結果をしめすものですからそうなります。しかし、それが目安だとなると、皆さん方はそれを目標にしようとします。そして、全員がそれをクリアしなければいけないのだと思ってしまいます。もともと半分

は通過しない格好で出てきたデータなのに、全員が通過するものとして目標を置いてしまうので、皆さんは子どもの尻をたたかなければいけないし、後ろを押さなければなりません。そこに子育てがゆがんでいく大きな理由があると私は見ています。

能力面の育ちというのは、訓練した、教えた、だから育ったというものではありません。もともと子どもの中に、人としての遺伝子が埋め込まれていて、それがいい具合に育てられれば順調に力となって出てくるのです。大昔、特別な保育をした、特別な教育をしたということがなくても、人はみんな大人になっていったのですから、何か特別なことを与えなければ子どもは育たないなどということはないわけです。そこでもう一度、育てるという営みに立ち返って考えてみますと、いろいろなことが見えてきます。

２.「できる、できない」の発達の見方を乗り越える

まず、「できる、できない」の発達の見方を乗り越える必要があります。裏返せば、皆さんは「できる、できない」という発達の見方の影響を深く受けて、それに振り回されている状況があると思うのです。何よりも家庭の保護者がこの考え方に振り回されています。病院で一緒に生まれたよその子どもはもうこれができるようになっているのに、うちの子はまだこれができない、それができるようになったら安心する、若いお母さん・お父さんが、これができて、あれができないということに一喜一憂しているというのが、今の日本の子育て事情ではないでしょうか。

そして、わが子が元気いっぱい育っているのか、いまひとつ元気がないのか、自信たっぷりに育っているのか、何か不安げに心配そうに育っているのかという観点で子どもを見る視点が、今、保護者にほとんどありません。あるいは、保育をする人も、本当はそういう目で子どもを見てほしいのですが、あれができたかできないか、集団の流れに乗れるか乗れないかという目でしか、子どもを見ることができません。一人ひとりの子どもが今、どんな気持ちで生きているかという視点で子どもを見られなくなった大きな理由は、発達という考え方が20世紀になって文化の中に入り込んできたからです。それがいつの間にか大人たちの頭の中にしみ込んで、子どもを「できる、できない」という観点で見るようになってしまいました。このことが今、育てるという営みを、かなり大

きくゆがめてしまった理由だと私は思っています。

その歪みの最たるものが今の日本の学校教育でしょう。本当は、子ども一人ひとり、生徒一人ひとりが、自分の思いを持った一個の主体として成長していくことが大切なのですが、そういうふうに子どもを育ててくという観点が今、学校教育の中にあるでしょうか。とにかく、カリキュラムを教えて、知的達成をあるレベルまで引き上げるところにしか、先生方の目が向かっていません。一人ひとりの心を育てるという考え方に、今、先生が立てないでいます。こうなる理由は、文科省にもあるでしょうし、家庭の保護者のものの考え方にもあるでしょうが、そういう状況をつくった根本は、できることが年齢とともに右肩上がりに増えていくという能力発達のモデル、何歳になればこういうことができるという発達のモデルではなかったでしょうか。そういうモデルができると、それが目標になり、それを何としてもクリアしなければうちの子は駄目なのだということになって、後ろから押そうという動きが生まれてきてしまいます。

私は、能力発達の図式そのものが間違っていると言うつもりはありません。能力面がこう成長していくというのはそのとおりですから、それを導いた学問が間違っているとは思いません。ただその中身を誤解して、それを保育の目標、あるいは子育ての目標、教育の目標と置いたところが問題です。そして、その基準に合っていれば子どもは順調に育っていると思い込むようになったことが問題なのです。

一人の子どもは、丸ごとの人間として生きています。能力面だけではありません。心もあります。体の面もあります。けれども今、皆さん方が子どもの育ちを見るときに、能力面しか見ていない。そこが問題なのです。

３．新しい発達の見方から見えてくるもの

３－１．＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ

そういうわけで、私は新しい発達の見方が必要があると考えました。これまでの発達の見方は、子ども一人のできる・できないを見るだけで、子どもが育てられて育つその全体をとらえ損ねています。どのように育てられているかということが、従来の発達の見方の中ではスポンと切り捨てられています。「何ができる？　これができて、これができないね」というふうにしか見ていませ

んから、どのように心が育てられているか、どのように心が育っているかが全然視野に入ってこないのです。指針でも要領でもいいのですが、発達の目安の中に心の育ちが入ってきていないのはそのためです。

これに対して、心の面に目を向ければ、心は育てられて育つものだということが分かります。能力の面の育ちには心の面も影響しているのですが、それでも能力面の大半は健康状態などの条件が整えば、持って生まれた力が、ある時間軸の中でだんだん花開いてくるという形で考えることができます。ですから、どう育てられたかということを、一応置いて考えることができるのですが、心の面の育ちは、どのように育てられているかということと切り離して考えることができません。

例えば、自分に自信がある子どもといっても、その子が一人で自信をはぐくめるわけではありません。「自信を持ちなさい」と言えば、持てるようになるということではありません。では自信はどうやって持てるようになるのかというと、それは周りから愛されているからです。つまり、自信のある子どもに育つためには、周りの大人から愛されるということが絶対に必要です。愛されていない子どもが、どうして自分に自信を持てるでしょうか。保育所の中で「自信たっぷりだな」と思える子どもは、みな家庭で大事にされ愛されています。不安いっぱいの暗い顔をして表情が乏しく、「何かあるな」と思わされる子どもは、大抵の場合、家庭で小突き回され、愛情豊かには育てられていません。

もちろん、劣悪な家庭環境で育てば能力面にも負の影響が表れがちですが、皆さんも保育所や幼稚園で経験があるように、家庭的には恵まれていないけれども、能力的はほとんど問題ない子どもも大勢います。ですから、家庭のひどさが、直に能力面に跳ね返るとは必ずしも限りません。ところが、心の面にはダイレクトに跳ね返ります。家庭でひどい扱いを受けている子どもが、明るく元気いっぱいなどということは絶対にありません。ですから、心の面に目を向けていけば、その子がどういうふうに育てられているか、どのように保育されているかということが必ず見えてくるわけです。

能力面を見ようとしてきたから、これまでは子どもだけを見ていればよかったというところがあるのですが、心の面を見ていこうとすると、その子がどういうふうに育てられているかを見なくてはなりません。つまり、親、兄弟、保育の先生、学校の先生、いろいろな人によって子どもは育てられていくわけで

すが、どのように育てられているかを見ないことには、その子の心の育ちは分かりません。逆に、その子の心の中に入り込んで、今どんな気持ちでいるのだろうかというところを見ていこうとすると、今その子の育てられているさまが浮かび上がってきます。

自分の保育の現場を振り返ってみれば、いろいろな心の育ちの子どもがいる現実にすぐ気が付くと思います。たっぷり愛されて、幸せいっぱいで元気いっぱいな子どももちろんいます。しかし、かわいそうなことに、それとは対照的に、本当は力があるだろうに、家で小突き回されて元気がない、保育の中で私がその子を守ってあげなければと言わざるを得ないような子どもたちが、保育の現場にはたくさんいます。

一方でそういう現実があって、皆さんはそういう現実の中で一生懸命に保育しておられるはずなのに、子どもの育ちなどというと、すぐさま発達の考えに戻って、あれができない、これができない、まだ集団に乗れないという話に引き戻されてしまいます。それでは駄目だと思うのです。根本的に心に目を向けて発達の問題を考え直すところにいかなくてはいけません。これまでのように能力面だけを見て発達の目安をクリアしていけばいいということではなく、それとは全く違った発達の考え方に立たなくてはいけません。

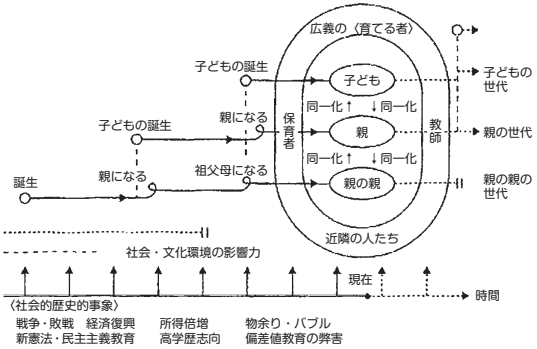

図１．＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ

レジュメの図１に「＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ」という題がついていますが、これは私のNHKブックスの本の題名でもあります。これまでの

発達の見方を変えていこうとするときに、これまでは小さい赤ちゃんがだんだん大きくなって大人になるというのが、発達のイメージだったと思うのです。ですから、どうしても能力面で考えられることになったのですが、子どもが大人になるまでの間は「育てられる者」として育てられていきます。そうして成人した大人たちがカップルをなして次の世代に命を引き継げば、そこでその人は＜育てられる者＞から＜育てる者＞へと変身します。つまり、能力的に完成された大人になっていくというイメージではなく、長い間＜育てられる者＞だった人が、今度は次の世代を＜育てる者＞に変身していくのが人の発達だと考えますと、発達の目標は、決して能力的に高い大人になるということではありません。ちゃんと次の世代を育てていけるような大人に育つことが発達だという見方が出てきます。

若いお父さん･お母さんは、今、なかなか子どもを育てることができません。とにかく、もう子育ては嫌だ、代わってほしい、お金なら幾らでも出すという保護者が、随分目立つようになってきました。どうしてそうなったのでしょうか。体は大人、能力面も大人、しかしまだまだ心は大人になっていないのです。つまり、学校現場では心を育てるということを教育でやっていません。能力面だけ育てていけば本当に大人になれるのでしょうか。産んだ子どもをかわいいと思って、しっかり育てるような大人に育たなければいけないはずです。本当は教育の中に、そのように育てるというカリキュラムがなければいけないと私は思います。英語、数学、国語という学力面だけを見て、そこでいい点が取れればいい大人になれるのでしょうか。たとえ東大に入ることができても、子どもをかわいいと思って育てることができないような大人に育ったとしたら、それでもいいのでしょうか。

能力面は確かに、いろいろ持って生まれた力もありますから、でこぼこがあるのは仕方のないことです。しかし、心をちゃんと育てていけば、必ずその人はちゃんとした大人になって、次の世代を育てていく大人になっていけます。そして、子どもを育てながら、今度は育てる人として発達・成長していくはずです。そう考えれば、単に二十歳前後で能力的に完成するのを発達と考えるのではなく、人の一生涯を発達という枠組みの中で考えていけるのではないでしょうか。それが図１の意味です。

この図１では、子ども、親の世代、親の親の世代と３世代が並んでいます。

一人の子どもは、親の世代から命を引き継いでこの世に生まれてきます。ところが、その親もまた、その親の世代から命を引き継いで生まれてきた人でした。今は親として育てる側に回っていますが、今育てる者である親は、みんなかつては子どもで、育てられる者でした。育てられる者であった人が育てる者になって、しかも育てる者として成長を遂げていく。子どもだけが発達するのではなく、親もまた発達するのだということを考えていかなければならないと思うのです。

これを言い出すといろいろなことを言わなくてはなりませんが、命が次々に前の世代から次の世代へとバトンタッチされている様子が、まず図１から分かると思います。つまり、一人の子どもの誕生には必ず両親がいて、そこから命が生まれてきます。ところが、その両親も、また前の世代から命をもらってこの世に生まれてきた人です。そうすると、この図は左下にどんどん伸びていくはずで、それを裏返すと、前の世代から次の世代へ命が引き継がれ、その世代から次の世代へとまた命が引き継がれるというふうにして、永々とこの命のバトンタッチを人類はしてきたのだということが分かります。私も、皆さんも、両親から命をもらわない限りは、この世に生まれてくることができなかったのです。

私の人生をどのように生きようと私の勝手だろうと、若者はうそぶきますが、あなたの命はあなた一人でつくることができたのですかと言いたいですね。あなたの命をあなた一人でつくったのなら、あなたがその命をどうしようと、あなたの勝手でいいけれども、永々と世代から世代へと順繰りに申し送られてきた命を、あなた一人の勝手で絶やしてよいのですか、ということが、この図を見れば考えることができるはずです。そして、パートナーと出会うことができれば、次の世代へと命をつなぐ可能性が生まれます。

現代では二十歳になったばかりの人が大人だなどとはとても思えませんね。まだまだ育てられる者です。それが30歳前後で結婚して子どもをなして、ようやく育てる者になった。この親の世代の線分を右に辿れば、親もまたあるとき子どもとして誕生しています。以後、成長を遂げ、図では子どもに命を引き継いで親になるところでくるりと１回転して親になり、そして今度は親として、つまり育てる者として成長を遂げていって今現在があるという事情が分かります。

ですから、初めての子どもが満１歳になったということは、親が親として１歳になったということだし、子どもが３歳になったということは、親が親として３歳になったということです。こうして育てられる者から育てる者へと移行し、この育てる者になった人が30年近く子どもを育てたところで、子どもは成人し社会人になって自分のところから巣立っていきます。そして、ようやく育てる者としての役割が一段落ついたと思うころで、今度は自分を育ててくれた親が老いてきて介護の必要が出てきます。そして、その親を介護し、最終的には看取ることになります。その仕事が終わってほっとするのも束の間、今度は自分が老いてきて子どもの介護を受け、子どもの世代に看取られて土に帰っていかなければなりません。

そうすると、一人の人間の一生というのは、およそ30年の育てられる者の時代、その後のおよそ30年の育てる者の時代、10年ぐらい介護し看取る時代、そして残り10年ぐらいの介護され看取られる時代を経て、土へと帰る過程だということになります。育てられる者から育てる者へ、介護し看取る者から介護され看取られる者へというように、およそ80年の人生が描かれます。私はこれが人間の一生涯の発達だと思うのです。そこには能力面で完成していくという従来の発達のイメージはありません。立場がくるくる変わっていきます。自分の親の世代が辿ってきた道を、１世代遅れて私が歩んでいき、さらに自分の子どもが１世代遅れて私の後を追いかけていくというように、人類は世代から世代へと代々順繰りに申し送られるようにして、それぞれの人生を送ってきたのではないでしょうか。これがまずこの図１の意味です。

そして図１の内側の楕円を見ると、子ども、親、親の親の３世代が楕円の中に括られています。私がNHKブックスで書いたときには内側の楕円しか図に書いていませんでしたが、最近、それでは不十分ではないかと考えるようになりました。つまり、血縁の３世代のつながりは、これでうまく説明がつくかもしれないけれども、子どもが育てられて育つという現実を考えれば、子どもは決して親によって育てられるだけではありません。いろいろな人が育てる営みに参加しています。つまり、保育の人、隣近所の人、学校の先生も、その育てる者の中に入ってくるでしょう。そこで、それらの人を「広義の育てる者」という意味で外側の楕円を書き加えることになったのでした。

私はこれを関係発達の図式と呼んでいますが、この図から分かるように、人

は関係の中で発達していきます。能力面の発達なら個の発達でいいのですが、心の面の発達を考えていくと、どうしても関係の中での発達を考えざるを得ませんので、関係発達という言い方をしているのです。そのときに、子どもの発達に影響を及ぼすのは親だけではなく、子どもを育てることにかかわる周りのすべての人が影響を及ぼすし、その中で、子どもは一年一年と成長を遂げていくのです。

３－２．＜自分の心＞を規定する要因

図１のように考えることによって、二十歳くらいで右肩上がりに能力面が完成するというような、従来の能力発達の図式をまずは大きく見直すことができます。そして、これまでは能力面にしか目を向けてこなかったという反省に立ち、やはり心の面に目を向け直す必要があるだろうというところから、図２には自分の心に影響を及ぼす要因を描いてみました。

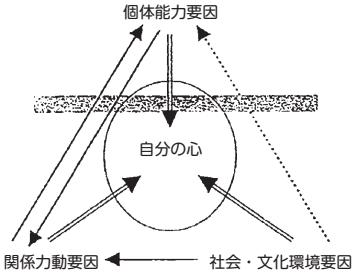

図２．＜自分の心＞を規定する要因

まず、子どもの心の育ちに影響を及ぼす要因の一つとして、「できる、できない」に関する個体能力要因を挙げることができます。つまり、いろいろなことができるようになってそれが自信になったとか、みんなができることがまだ自分にはできないから自信を持てないとか、確かに「できる、できない」は心に反響してきます。このことが図２の一番上から自分の心の中に入り込む矢印として示されています。

もう一つ、関係力動要因というのは、皆さんには耳慣れない言葉ですが、これは自分にとって大事な大人（両親、兄弟、保育の先生など）が、自分のこと

をどう思ってくれるかということに関わる要因です。何をしてくれるかではありません。関係力動というのは、心の問題を考えるときに必要になる言葉です。皆さんは育てるというと、ご飯を食べさせたとか、かわいい服を着せたとか、体を清潔にしたなどの具体的な行為を考えます。今の若いお母さんたちに「子どもを育てることで一番大事なことは何でしょう？」と聞くと、「ミルクを飲ませることでしょう、おむつを換えることでしょう、おもちゃを買ってあげることでしょう」と言うように、全部自分の子どもへの関わり（行為）を考えます。それに対して私が「子どもを育てるときに一番大事なことは、子どもをかわいいと思うことですよ」と言うと、「はあ？」という表情をされて、こちらが拍子抜けしてしまいます。

もちろん、栄養を与えなければ死んでしまいますから、おっぱいは大事だし、体を清潔にすることも大事だし、健康を配慮することも大事です。しかし人間の子どもは、愛されていないと分かった途端に元気をなくすような、とても精神的な生き物です。愛されていると分かると、どんと元気が出てくる生き物です。関係力動要因というのはそのことに関わる要因だと考えていただければよいでしょう。「あなたのことが大事だよ」、「あなたのことをかわいいと思っているよ」、「愛しているよ」、そういう言葉を実際にかけるということではありません。内心でそう思っているかどうかが大事なのです。

おっぱいを飲ませたとか、かわいいお洋服を買って着せたとか、行為は目に見えます。今の若いお父さん、お母さん方というのは、みんな、そういう目に見えるところでものを考えようとしていて、心の面を考えることがほとんどありません。可愛がっていないかといえば、可愛がっているのですが、それはみな条件付きのかわいがり方で、いい子にしていたら可愛がってあげる、いい子にしていたら愛してあげる、でも、泣きわめいたり、むずかったり、言うことを聞いてくれないときは、もう知らない、勝手に泣いていなさいととほうり出してしまう。これでは子どもは育たちません。確かに泣かれれば親としても辛いし、決してうれしいわけではありません。しかし、そういうマイナスの状態であっても、泣いているあなたを見捨てることはない、必ず私が守ってあげる、今どうしたらいいか分からないけれども、とにかく見捨てないし、よしよしとだっこしてあげるということが、今、できないのです。子育てで一番大事なことは、泣いてむずかっている子どもに、「おお、よしよし」ができるかどうか

だと言っても過言ではありません。言ってみれば、これが子育ての一番のポイントなのです。

今の若いお母さん方は、泣くからには原因があるだろう、原因を取り除けば泣きやむだろうと考える傾向にあります。原因が分からないから、どうしていいか分からない、どうしたらいいか教えてくださいと言って電話をする。子育て110番やいのちの110番にとにかく電話して聞くという姿勢ですね。そうではなく、どうしていいか分からなくて悩むし、困るけれども、どうしてあげたらいいかなとおろおろしながらでも、「よしよし、よしよし」と子どもをだっこしてあげる。そうしているうちに、子どもは自分で泣きやんでいくことができます。それが子育てで一番大事なことなのですが、その辺がすっぽかされてしまっているように私には見えます。そういう点で、関係力動要因というのは、周りの人から子どもがどう思われているかに関わる要因だといえます。

中には「あなたなんか、生まれきてほしくなかった」と思う親がいるかもしれませんが、親にそう思われたとき、子どもはどうやって生きていけばいいのでしょう。親に疎まれるということは、身体的な虐待と同じように、子どもにとっては大変な心の傷になる出来事です。要するに、愛されているのか、うとまれているのかが、関係力動要因として子どもの心の中にどどっと流れ込んでくるというのが矢印の意味です。

そしてもう一つは、社会・文化環境要因です。子どもが小さい間は、この要因はあまり効いてこないかもしれませんが、子どもがある程度大きくなると、自分はどういう子どもなのかというように、社会の持っている枠組みの中で自分のことを考えようとします。しかし子どもが小さいときには、この要因は関係力動要因を介して子どもに間接的に影響すると考えることができます。例えば、いろいろな幼児塾がもう３歳では遅いなどという折り込みチラシを新聞の中に入れますと、それを見たお母さんは心配して、うちも小さいときから幼児教育に取りかからなくてはいけないと思いはじめ、実際に行かせようとすると子どもは行きたがりません。そのような子どもに「どうして、うちの子はいうことを聞かないの」としかり飛ばし、あなたは駄目な子ねという目で子どもを見るようになるという場合を考えてみればよいでしょう。実際、幼児教育に向けて、あそこもやっている、ここもやっているというような文化環境が用意されてしまいますと、必ず親の欲望の次元が大きく揺さぶられてしまいます。そ

して、その親の欲望（心の動き）が今度は子どもの中に入り込んでいくという形で、間接的に社会・文化環境が子どもを翻弄するわけです。

子どもは決して早くから英語を覚えたいと思っているわけではありませんし、早くから漢字を覚えたいと思っているわけでもありません。でも、みんなやっているよ、あそこもやっているそうだよ、ここもやっているそうだよ、となると、たちまちお母さんは落ち着かなくなって、やはりうちもやらなければと思うようになります。そして､それに応じようとしない子どもを見て「もう、うちの子は！」となって、子どもとの関係が険悪になっていくのです。

そうして見ると、この社会・文化環境要因は、子育てに大変な影響を持つということが分かると思います。赤ちゃんグッズを売っているお店や、幼児教育産業に携わっているところは、やはり商売ですから、さまざまな工夫をして宣伝し、親の気持ちをつかもうとします。そうすると、親はそれに動かされて、それを自分の子育てに取り込み、子どもはそれによって翻弄されるわけです。今、わが国の子どもたちはそういう流れの中で、嵐の中の舟のように、揺さぶられて成長せざるを得ない環境にあるように見えます。

３－３．重要な他者イメージと自己イメージの成り立ち

図３は『保育・主体として育てる営み』という本の中に入れた図ですが、愛されて育つ子どもは幸せだけれども、愛されないで育つ子どもは、とても不幸であるということを示す図です。心の育ちを考えるときに、その問題に踏み込まざるを得ないからです。

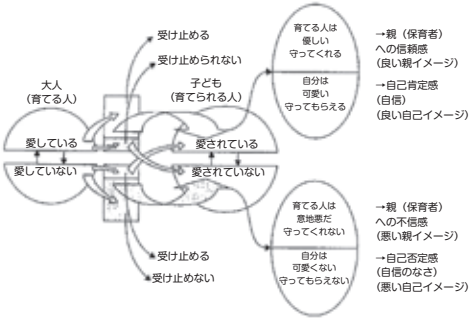

図３．重要な他者イメージと自己イメージの成り立ち

まず、図の左上の半円は、大人が子どもを愛している場合です。その中で、子どものいろいろな思いを受け止めようとしたり、あるいは受け止め切れなかったりするわけですが、子どもを愛している親であれば、子どものいろいろな思いを大概は受け止めることができます。そのことが図の長方形の中で、受け止めるという部分の面積が多くなっている理由です。そういう親の対応を通して、子どもは「自分は愛されている」と思うことができます。つまり、大人の心の中にある「あなたのことを愛している」という思いが、子どもの心の中に入り込んできて、子どもは「自分は愛されている」と思えるということです。そういう経験を小さいときからずっと繰り返してきますと、自分を愛してくれる親や保育者（育てる人）は優しい人、守ってくれる人というような肯定的な大人イメージを子どもは形づくります。１回だけでは駄目ですが、毎日毎日愛されているという実感を持てれば、それが記憶の中に沈澱していって、あるイメージを形づくられるのです。つまり、お母さんは優しい人、保育の先生は優しい人、いい人、いろいろなことがあっても最後はきちんと守ってくれる人、という親イメージや大人イメージがつくられるということです。

親や保育者に対してそういう肯定的な親イメージ、大人イメージがつくられるとき、その裏返しとして、どうして親がこうして僕（私）のことを愛してくれるかといえば、僕（私）がかわいい子だからだ、僕（私）がいい子だからだというように、必ず良い自己イメージも同時に形作られます。右側の卵型の上半分は肯定的な親イメージ、下半分は子どもの自己イメージになっているのはそのためです。つまり、ちょうど表裏になっていて、親に対して肯定的な親イメージを形づくることのできる子どもは、自分に対しても肯定的なイメージを形づくるということです。これが自己肯定感であり自信なのです。

自信を持てる子、自己肯定感を持てる子に育てましょうなどと言いますが、それは、子どもが親に対して信頼感を持てる、親や保育者に対して良いイメージを持てるということと同義なのです。親に対して否定的なイメージを持っていながら、自分に対して肯定的なイメージを持てる子はいません。表裏なのです。そこがどうも十分に理解されていないように思います。信頼関係が大事、自己肯定感が大事ということは、皆さんも耳にたこができるほど聞いていると思いますけれども、ではそれがどうやってつくられるのかということが必ずしも考えられてきていません。それの発端は、大人の中の「あなたはかわいい」、「あ

なたのことを愛しているよ」、「あなたのことを大事にしていくよ」という思いです。それが結局は、子どもの中に肯定的な親イメージと、肯定的な自己イメージをつくるということなのです。

これの逆の展開を見るのが図の下側です。親の中に「この子は生まれてきてほしくなった」というような思いが繰り返し抱かれるとき、あるいは親が経済的に逼迫し、子どもどころではなくなって、子どもそっちのけで生活して子どもを愛しているという気持ちが動かないとき、当然ながら子どもは「自分は愛されていない」と思います。もちろん、時には良い思いをすることもあるかもしれません。基本的には愛されていないのだけれども、時々ファミリーレストランに連れていってもらったとか、遊園地に連れていってもらったとか、自分の気持ちが受け止められるときもたまにはあるでしょう。ですから、図の下の長方形では、受け止めてもらえるところが少しあって、受け止めてもらえないところがたくさんあることが示されています。それが結局は子どもの心の中に入り込んで、自分は基本的に愛されていないという経験になります。そしてそれが繰り返されると、負の親イメージ、負の大人イメージができ上がり、それと連動して子どもには、自分はかわいくないのだ、守ってもらえないのだ、生まれてこなければよかったのだというような、負の自己イメージができ上がります。これは非常に恐ろしいことです。そして大きな犯罪を犯す人たちのほとんどがこれに該当します。

昨日もマツダで大変な事件がありましたが、あのように「自分なんかもうどうなったっていい、その代わりみんなにめちゃくちゃしてやる」という人たちは、必ず負の自己イメージを持って自暴自棄になっています。これはある種の自己破壊衝動と言ってもいいのでしょうが、自分で自分を壊してしまいたいような衝動にかられるのは、自分に対して負の自己イメージを持っているから、つまり自己肯定感を持てない状態にあるからです。こういう状態は非常に恐ろしいことに繋がりやすいと思います。こういう心根を持ったまま大きくなっていくということは、それこそ大きな犯罪を犯す予備軍をつくることにつながります。だから、子どもは大事に育てられなければいけないのです。

大事にするということは、ご飯をちゃんと食べさせて、かわいい服を着せてということではなく、とにかく「あなたのことが大事」と思うということです。そこは目に見えない部分なので、あそこはちゃんと子育てしているのではない

か、かわいい服を着せているし、ファミリーレストランにも連れていっているしというように、行為のところで見ていますと問題ないように見えます。しかし、では子どもは元気かというと、全く元気がない。特別殴られている様子はないけれども、とても元気がない。それはほとんどの場合、愛されていないからです。

そのように心の面に目を向けて皆さんが今の自分の保育を振り返ってみると、ちょっと心配だ、大丈夫だろうかと思うような子どもがたくさんいるのではないでしょうか。そのあたりを今、本当に考え直さなければいけないところに来ています。ただ勉強ができればいい、ただ学力を高めればいいというように、保護者ニーズが動いていっていますが、皆さんもそれにつられて動いていってしまったのでは駄目ではないでしょうか。

４.一個の主体として「育つ―育てる」

４－１.「させる」保育から、子どもの思いを受け止める保育へ

今まで私が言ってきた新しい発達の見方というのは、これまでの個体の能力面しかみなかった点からすれば、確かに新しい発達の見方ですが、ある意味ではごく当たり前の見方です。特別に奇をてらった考え方でも何でもなく、昔から人はこのようにして子どもを育ててきたのではないかと思う見方なのですが、なぜかこういう考え方が学問の世界でもなかなか理解されません。今日のような話をストレートに保護者にぶつけても、なかなか理解してもらえません。講師の先生は何だかんだ難しいことを言っておられたけれども、やはり子どもに力を付けてなんぼでしょうという話に、どうしても保護者はまってしまいます。これはとても残念なことです。

子どもを育てる上で、能力面の育ちがなくていいとは決して思いませんが、心の土台がしっかり育っていけば、能力面の育ちは必ず付いてきます。逆に、能力面をいっぱい育てていけば心の面の育ちも付いてくる、などということは決してありません。保護者も保育に携わっている皆さんも、そこがなかなか信じられないのでしょう。とにかく早く結果を出したい。そのためには、これをさせなければいけない、あれをさせなければいけない。そして今、私が見るところ、全国の保育の流れは、これをしましょう、あれをしましょうという「させる保育」になっています。子どもがそれをやりたいか、やりたくないかにか

かわらず、あなたにとってこういうことが必要なのだから、これをしましょうという保育です。もちろん、「させる」という面は保育や子育ての中に必ずあります。しかし、「させる」ということにウエートがかかりすぎていると子どものこころが育ちません。ですから、「させる」ことに傾きすぎた保育の在り方を、私は「させる保育」と呼んで、これを変えていかなくてはならないと思っているのです。

もう一つ、「頑張ってやろう」、「もっと頑張ろう」、「〇〇ちゃん、よく頑張ったね」というように、頑張らせて褒める保育も駄目だと思います。よく、頑張ったところを褒めてどこが悪いのだと言われます。子どもが自分から一生懸命頑張ったときに、褒めるのは大いに結構なのですが、子どもに今、それに向かう気持ちがあるかどうかは関係なく、大人が自分が願っていることをさせて、子どもが嫌な思いをしながらも一生懸命頑張ったら、それを「頑張ったね」と褒める保育や子育てが目につきます。子どもは褒められたいから、嫌だ、やりたくないと思っても、我慢してやってしまいます。そういうことが累積していった結果、今、子どもたちの心は疲弊しているのです。そして、させる保育、頑張らせて褒める保育をしている人たちは、必ず保護者の顔色をうかがって保護者に見せる保育をしてしまっています。子どもが楽しめるような行事ではなく、保護者に見せる行事、保護者が拍手喝采してくれる行事のために、毎日の保育があるかのような保育が行われていないでしょうか。それが本当に子ども一人ひとりを育てることにつながっているでしょうか。

こう言えば、ちょっと胸の痛む思いの方もいらっしゃると思いますが、私は、冗談抜きに、こういう保育は変わっていかなければいけないと思います。これで保育をしているという気分、これで子どもを育てているという気分では駄目だと思います。本当に子どもが頑張ったときのつらい気持ちにきちんと共感して、「本当に頑張ったね、先生はうれしいよ」という思いを子どもに返しているでしょうか。結果が出れば、次はこれというように、次々にさせていないでしょうか。

今日はエピソードの話は時間の関係でできませんが、今、保育士さんが保育の現場をエピソードに書く、そしてそのエピソードを職員皆で読み合うということが、保育を見直す一番の近道だということで、私は保育の皆さんにエピソード記述を推進しています。そして、そのエピソード記述が必要なのは、目に見

えない心の部分を描き出すことができるからです。

これまで皆さんがエピソードと言っているのは、こういう保育教材を用意したら、こういう保育が展開しましたというような活動の事実経過を書く記録でしかありませんでした。そういう記録は、いくら書いても保育の役に立たないと思います。私が主張しているエピソード記述は、ほかの先生たちが言っているエピソード記録とは違って、自分が見たこと、自分が経験したことを、自分の気持ちや思いを込めて描くというもので、客観的な事実だけを述べればいいという記録ではない記録です。

○○ちゃんが今こんな気持ちでいると分かったので、私はここでこういう対応をした、そうしたら、○○ちゃんがこういうことをしてくれたというような、自分の思いの動きも一緒になって描き出していくようなエピソードのことを、エピソード記述と呼んで、エピソード記録と区別しています。そういうエピソード記述を通して、目に見えない子どもの気持ちの動きを描き出します。そのとき同時に、自分の気持ちの動きも描き出すことができます。そうすると、子どもと保育者との「育てる―育てられる」という関係がエピソードの中に描き出せてきます。時間もかかるし手間暇もかかるのですが、そういう営みを丁寧にやっていくと、きっと保育は変わります。現に、私はいろいろな地域の保育所・保育所へ出かけていって、このエピソード記述の研修をしていますが、それをきちんとやり始めた保育所・保育所で、は随分保育が変わってきました。保育者が主導して次々に計画どおりに保育を運んでいくような「させる保育」から、子ども一人ひとりの思いを受け止めて、それに沿って保育していくというように、保育の流れが変わってきています。

これまでは、集団なのだから、どうしても全体として動かさなくてはいけないのだ、１日の時間のスケジュールに沿って動かさなくてはいけないのだと思い、全体の流れから漏れ出た子どもたちを、何とか全体の中に引き戻していけばいいのだ、それで全体が流れていけばいいのだというような保育になっていたように見えます。もちろん、集団を保育しているのですから、そういう面はある程度必要なことですが、しかしそれだけでは多分、保育はうまく展開しません。先生の思いは実現できるかもしれませんが、子ども一人ひとりは気持ちが燃焼していません。そういう保育をしていたのでは、多分子ども一人ひとりの心の育ちにはつながらないでしょう。○○ちゃんの気持ちがこのように動い

たというところをキャッチでき、それに対して自分がこう応えたというところを、描き出せていかないと駄目ではないかと思います。

４－２.「私は私」と「私は私たち」のバランス

そのようにして、子ども一人ひとりを、ある思いを持った一個の主体として育てていくということが、保育の大きな目標になってほしいと私は思っています。つまり、発達の目安に沿ったかたちで保育を展開することが保育の目標ではなく、一人の丸ごとの主体として育てていってほしいし、心をちゃんと持った主体として育ててほしい。それを保育の目標と考えてほしいと思います。それが図４に表現されています。

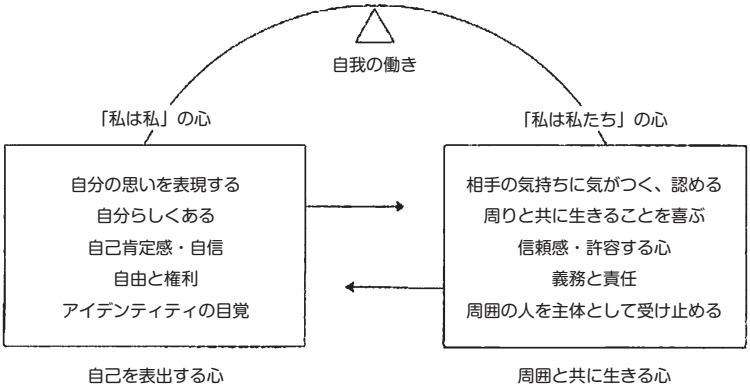

図４. 一個の主体であることの二つの側面

「一個の主体であることの二つの側面」と図の題目が挙がっていますが、このやじろべえが一人の子どもの心の中に宿り、その中身がだんだん埋まっていくのが保育の目標だし、育てることの目標だと思っています。このモデルが学校教育にないから、学校教育は結局、各教科の点数が取れるように、カリキュラムをこなせるように、という教育目標になってしまったのではないでしょうか。英語だ、数学だ、国語だと、各教科のカリキュラムをこなす必要は確かにあるのですが、一人の人間として育てるという部分がないと、めちゃくちゃな大人がいっぱい育ってきて、モンスターペアレントに代表されるように、自分

勝手で自己中心的な人間しか育っていかないという状況になります。そのことを考えたときに、皆さんが「主体」という言葉で理解してきな中身そのものを、つくり変えなければいけないという考えが生まれ、この図を描くことになりました。

一個の主体には二つの心がなければなりません。それは、「私は私」と言える心と、「私は私たちの一人」と言える心です。この二つは、あちらを立てればこちらが立たずの関係にありますから、「自我の働き」と書いた三角形を支点にやじろべえの格好になっています。この二つの心はやじろべえのように支点を中心にふらふらしていますが、何とかそのバランスを図ろうとするのが自我の働きです。まず、皆さんが子ども一人ひとりの心に目を向けたときに、ちゃんと「私は私」と自信を持って自分を強く押し出せる子どもとして育っているでしょうか。これがしたい、これはしたくない、これが嫌だ、これが欲しいということがちゃんと主張できる、自分の芯になるようなものをしっかり持った子どもとして、育っているでしょうか。これは保育所・幼稚園の子どもだけではなくて、本当は小学校、中学校の子どもたちにも問うてみたいことです。

「私は私」というのは、どちらかといえば「ほかの人ではない、この私」というように、私の中に閉じていく一面があります。私は唯一無二の私なのだ、あなたと私は違う、私は私なのだという一面です。誰にもそれがなければなりません。それがその人の個性でもあります。しかし、それだけでは主体だといえません。もし「私は私」という自己主張がしっかりできるということだけで、それを一個の主体だと言えるとすれば、モンスターペアレントも主体だということになりますが、私の今の考え方すれば、あれは主体としての両面の心のバランスの壊れた人です。なぜかというと、人間は自分一人で生きていくわけではなく、必ず周りの人と一緒に生きていかなくてはならない存在だからです。ということは、「私は私」と言えるだけでは足りないのです。「私は私たちの中の一人」、「みんなの中の一人」という感覚がなければ、どうして周りの人と仲良く折り合って生きていけるでしょうか。

確かに小さな赤ちゃんは「私は私」のところから育ってくるのですが、だんだん大きくなる中で、「私は私たちの一人」、「私は私たち」と言えるようなものが、集団生活の中で徐々につくられてきます。小さいときに愛されて「私は私」と言えるようになった子どもが、集団生活を営む中で、「みんなと一緒に

やったら面白いな」とか、「みんなと一緒がいいな」とだんだん思えるようになってきて、「私はもも組さんの一人」、「私はぞう組さんの一人」というような感覚が育ってきて、「ぞう組さんにいると楽しいな」と思えるようになります。そうすることによって、自分を認めてほしい、自分のことを分かってほしいという気持ちと、分かってほしければ相手のことも分かってあげなくてはいけないという気持ちのバランスが取れるように、子どもは育っていくことができます。それが一個の主体というものでしょう。

これは皆さん方自身に全部はね返っていくことです。皆さん方自身の内部で、このやじろべえがどのようにでき上がっているか、ちゃんとこのバランスが取れる大人に育っているかどうかが問題です。そして今、日本全体を振り返ったときに、このやじろべえが壊れている大人がいっぱいいるわけで、そこが問題なのです。特に今の若いお母さんたちが、このやじろべえのバランスがとれるようには育てられていません。だから、子どもを、こういうやじろべえが育つようにはなかなか育てていけないのです。子育ては世代から世代へと循環していくものです。ある１世代のところで壊れると、次々に次の世代に累が及んでいきます。どこかで立て直さなくてはなりません。ですから、まず保育の世界で、小さい子どもの中に「私は私」と言える心と、「私は私たち」と言える心を育てることを保育の目標にしていくことが必要なのです。

一人ひとりを卒園させる時点で、Aちゃんもこのやじろべえができている、Bちゃんもこのやじろべえができている。能力は、子どもによっていろいろでこぼこもあるし、このやじろべえの中身も微妙に違っていて、それぞれが個性的だけれども、とにかくまあまあこのやじろべえはできているな、と思って小学校に送り出すことができれば、絶対にその子は学級崩壊を起こすことにはなりません。逆に、あの力この力と、早くからたくさんいろいろな力を付けても、このやじろべえを作り損ねたまま、小学校に送れば、その子が学校不適応になるのは目に見えています。そういう観点で保育をしていなくて、目先のところで「あの力、この力」と動いてしまっていることに、私は非常に危機感を覚えるのです。

今こう言っても、急に保育は変えられませんと言われるかも分かりません。今述べたことは保育所保育指針にも書いていないし、幼稚園教育要領にも書いていないのですが、なぜ日本の保育が保育の根本的な目標を持てないのか、と

ても不思議な感じがします。保育の一番の目標は、一個の主体として育てていこうということです。そして一個の主体であるということの中身は「私は私」と「私は私たち」という心であり、そのバランスです。そういう二つの心のバランスのとれた子どもを育てていくのが保育の目標なのだと言いたいわけです。

５．大人の育てる営みを振り返る：「ある」を受け止め「なる」に誘う

５－１．「ある」を受け止める養護的対応

大人が子どもを育てる営みを振り返るときに、あれをされる、これをさせるという前に、やらなくてはいけないことがあります。それは、子どもの今のあるがままの思いを受け止めるという働きです。つまり、「○○ちゃんはこうしたかったんだね」、「○○ちゃんはこれが嫌だったんだね」とその子どもの思いを受け止めることです。

受け止めるということは、そのまま認める、受け入れるということではありません。例えば、ほかの子が使っていたおもちゃを、どうしても使いたくて、ぱっと取り上げたとします。そのとき、皆さんはどう対応しますか。「どうしてそれを取るの。いけないでしょう」、「黙って取っちゃ駄目でしょう。返して、ごめんなさいを言いましょう」という保育をしていませんか。これは最悪の保育のパターンです。皆さんは、善悪を教えるのだとか、規範を教えるのだとか言って、自分の保育を肯定しようとします。しかし、それで本当に子どもの心に規範意識や善悪の意識は宿るでしょうか。皆さんがそのように子どもを叱るだけだったら、多分子どもの心に恨みが残るだけです。先生は自分の存在を否定したというようにしか、子どもはとらないでしょう。

では、叱ってはいけないのかというと、もちろん叱らなくてはいけません。ただ、ほかの子の使っていたものをぱっと取り上げたというときに、そのおもちゃを使いたかった、それが欲しかったという思いそのものが悪いとは言えません。だから、「○○ちゃんはどうしてもこれを使いたかったのね」と受け止めると、子どもは「そうだよ、僕はこれを使いたかった。僕のお城にこのブロックは要るんだもの」と一生懸命、自分を弁護して主張するでしょう。そのとき「でも、それはよかったかな。ほら、Bちゃんは取られて嫌だと泣いているよ。Bちゃんがかわいそうじゃない？　黙って持っていくのは先生も嫌だな」と先生の思

いを伝える。

つまり、子どものこれを使いたかったという気持ちをまず受け止めた上で、それから、先生のそうしてほしくなかったという気持ちを伝える。これが子どもを保育していくときの基本形なのです。受け止めて、先生の思いを返す。受け止めて返す。その「受け止めて」という部分が今、いまごっそり抜けて、ただ「それは駄目だ。そういうことをしてはいけないのだ」という先生の気持ちを伝えていけばいい、それが教育的な働きかけなのだと理解してしまう。ここが今、保育の現場を見ていて、私が一番気になるところです。ですから、私の出入りしている保育の場では、まず受け止めることが肝心と言っているわけです。

そして、今の「ある」を受け止めること、つまり、今のあるがままの子どもの思い、あるがままの姿をしっかり受け止めると、子どもはやはりうれしい気持ちになります。「これが使いたかったんだね」と言うと、「うん」。「そうか、どうしても使いたかったんだね」と受け止めると、そこで子どもはほっとします。しかしそのとき、子どもは「あ、自分はいけないことをしたな」と、自分のしたことがもう分かりかけています。そのときに「さあ、ほしくなったときにどうすればよかったかな。ぱっと取るのは、先生は嫌だな」と先生の気持ちを伝えていくと、だんだん下を向いて、いけなかったという気持ちになってきます。そのプロセスを省略して、「どうしてそうするの。駄目でしょう。返しなさい。ごめんなさいを言いなさい」と叱ると、おもちゃを返して「ごめん」と言うかもしれませんが、子どもの心には恨みだけが残ります。これでは子どもの心の育ちようがありません。細かいようですが、そのようなところが保育の場には随所にあるわけです。

そのことによって、子どもは大人にぐいぐい圧迫されて、自分の思いを受け止めてもらえないままにいっぱい不満が残り、受け止めてもらえないという思いを残して、日々を送っているように見えます。家庭でもそうだということでは、子どもの心の育ちようがありません。まずは「ある」を受け止める。そうすると、必ず子どもの内部から前に向かう力が湧いてきます。こうして、「ある」を受け止めてもらうと、子どもはいまの「ある」にとどまっていないで、必ず次の「なる」に向かって自分から変わっていきます。おそらく、この「ある」を受け止めると「なる」に向かうというところが、皆さんはなかなか信じられ

ずにいるのだろうと思います。

私は、子どもの思いを受け止め・認め・支える働きを、「養護の働き」と呼ぶべきだと思っています。「養護の働き」とは、決して小さい子のお世話のことではありません。子どもの思いを受け止め・認め・支えるところの働きは、全部「養護の働き」です。そして、ここはそうしてほしくなかったとか、ここはこうしようというように、先生の思いを子どもに伝えていく働きかけは全部「教育の働き」と呼んではどうかと思います。そうすると、受け止め・認め・支えるという「養護の働き」と、先生の思いを子どもに伝えていく「教育の働き」とが混然一体となって切り分けられないものが、保育なのだという考え方に至ります。

５－２.「なる」を誘う教育的対応の偏重

ところが、幼稚園教育要領には「養護」という言葉がありません。そこが問題です。だから保育所保育指針も混乱していて、養護と教育が一体となったものを保育だと言うかと思えば、保育内容のところでは養護の中身として生命の安全と情緒の安定を言い、教育というのは５領域で幼稚園と一緒だなどという話になっていますが、そこが一番指針のまずいところです。つまり、養護を生命の安全と情緒の安定と言うにしても、なぜそれが幼稚園にあってはいけないのでしょうか。幼稚園の子どもだって生命を守らなければいけないし、情緒も安定させなくてはいけないはずです。ですから、私は幼稚園教育要領の中に「養護」という言葉がないのがおかしいと思っています。指針に養護があるからではなくて、子どもの気持ち、子どもが大事という思いの中から、「そうか、あなたはこういう気持ちなんだね」、「こうなんだね」と受け止めていく働きはすべて「養護の働き」であり、それに対して「ここはこうしよう」、「こうしてみない？」、「ちょっと頑張って、これをやろうよ」と誘う働き、あるいは「ここはこうすると、うまくいくよ」と教える働きや、「これはやめてほしいな」と伝える働き、こういう働きを全部「教育」という言葉でくくれば、幼稚園、保育所に関係なく、養護と教育の全体を保育と呼んでいくことができるのではないでしょうか。

幼稚園教育要領からは「保育」という言葉は、ほとんど消えてしまい、「教育」という言葉で、すべてを置き換えていこうとしていますが、私はそれに大

反対です。やはり就学前は保育という言葉で呼ぶのがよいと思います。そしてその保育の中では養護の働きと教育の働きがいつも一体になっていると考えます。教育が必要ないといっているのではなく、大人の思いを伝えていく面はすでに教育の働きなのです。

そのように考えると、今の保育の中では、養護の面が非常に弱くなっていることが改めて分かります。養護と教育がバランスされて、養護と教育一体のものになって初めて、保育といえると思うのです。ですから、まずは「そうだね、○○ちゃんはこうしたかったんだね」と子どもの気持ちを受け止めることを出発点にしなければなりません。給食に苦手な食べ物が出て、それが食べられないというときに、「苦手なものが出たね、残念だったね、どうしようか」、苦手なものとにらめっこして困っている子どもを前にして、「困ったねえ」というように、気持ちをまず受け止めてほしいと思います。それなのに、「苦手なものをなくしましょう」とか、「苦手なものも頑張って食べなきゃ」とか、もっとひどいときには、「もうみんなのお皿はぴかぴかだね。お皿がぴかぴかじゃないのは誰と誰かな」と言って、苦手なものとにらめっこしている子どもに圧力をかけるような保育が至るところで目に着きます。本当にげっそりします。

早く食べ終えた子がいい子、それが保育でしょうか。早く食べ終えて、給食を終わりにして午睡に向かっていってくれれば、保育者としてはうれしいでしょうけれども、子どもの「これがどうしても僕は苦手で」という気持ちをまず受け止める。そして、その次の対応として「これは給食の先生がせっかく頑張って作ったんだから、一口くらい食べてみない？」とか、「先生が一口食べさせてあげようか」とか、「先生と一緒に食べようよ」とか、「じゃあ、ちょっと減らしてみる？」とか、いろいろ考えられるはずです。「これが苦手なんだ」というその子の気持ちを、なぜ否定しなければいけないのでしょうか。

「苦手だねえ」と言うと「うん」という、この「うん」が大事なのです。自分は先生に受け止めてもらえたと思えると、もう一度、一口挑戦してみようかという気持ちがわいてきます。それを「頑張って食べなきゃ駄目よ」「ほら、あの時計がここまで来るまでには終わろうね」などと圧力をかけると、子どもはますます喉がふさがってきてしまいます。そういうことが家庭でも起こっています。

要するに、今、家庭でも保育の場でも、「養護の働き」が基本的に弱くなっ

ていて、みんな教育、教育というところに流れてしまっているということです。それが私はとても気になります。そして今、幼稚園は小学校との連続性という考え方の中で、教育にさらにウエートを置こうとしているように見えます。その方が保護者も喜ぶからということで、そういう動きを見せていますが、私はそれも大変気になっているところです。

６．現代はなぜ「なる」を急ぐのか

なぜ「なる」を急ぐのでしょうか。「なる」を急いで、次はこれをさせて、あれをさせてというのは、結局は「させる」ことに繋がっています。ぐいぐいと大人が引っ張って「なる」を急ぐものですから、「ある」を受け止めてもらったところで、子どもの内側から芽吹いてくる「なる」への芽が、みんな摘み取られてしまいます。「なる」の芽が摘み取られてしまうから、子どもは自分から動きません。動かないので大人はもっと引っ張らなければいけません。この悪循環が今、保育をゆがめているのです。問題は、「ある」をしっかり受け止めると子どもが変わっていくのだということを、保育の皆さんが信じられるかどうかです。実践の中でこれに気が付いた保育者、つまり、しっかり受け止めていると、子どもは変わっていくのだということを確信した保育者は、自分の保育を変えていくことができます。ところが、頭では分かっていても確信を持てないと、やはり引っ張ってしまう。そこが問題なのです。

なぜ「なる」を急ぐかというと、やはりそこで「発達させなければならない」という考え方が頭をもたげてくるからです。発達の階段を登ることがよいことなのだと考えてしまうので、「なる」を急がせてしまうのだろうと思います。ですから、今日お話ししてきたように、従来の発達の見方を私がいま紹介したような発達の見方に変えていくことができれば、随分と違った見方が出てきて、「ある」を受け止めるというところを、皆さんも大事にしていけるのではないでしょうか。

７．本来の「育てる」営みへと回帰する必要

これまでの議論から分かるように、「ある」を受け止め・認め・支える養護の働きと、子どもが自ら「なる」に向かえるように、誘い・導き・教え・伝える教育の働きのバランスを回復することが急務です。

「ある」をしっかり周囲の大人に受け止めてもらった子どもは、自分の存在が認められた喜びや自分への自信を背景に、自ら何かをやってみて、その力を確かめ（これができる、あれができる）、それを梃子に自分の世界を広げようとし（こうしてみたい、こうしてみよう）、さらに受け止めてくれた大人への肯定的な同一化（憧れ）を背景に、大人の姿を自分の中に取り込もうとするようになりま（あのようになりたい、先生のようにしてみたい）。これが養護の働きによって生まれる子どもの「なる」への気持ちの動きです。

そこに大人の教育の働きかけがうまくかみ合うと、子どもはさらに興味を広げて、意欲的に物事に取り組むようになります。つまり、「ある」から「なる」へ、「なる」から「ある」へ、そしてまた「ある」から次の「なる」へという循環が生まれます。これが子どもの発達なのです。

8．養護と教育が一体となったものが保育

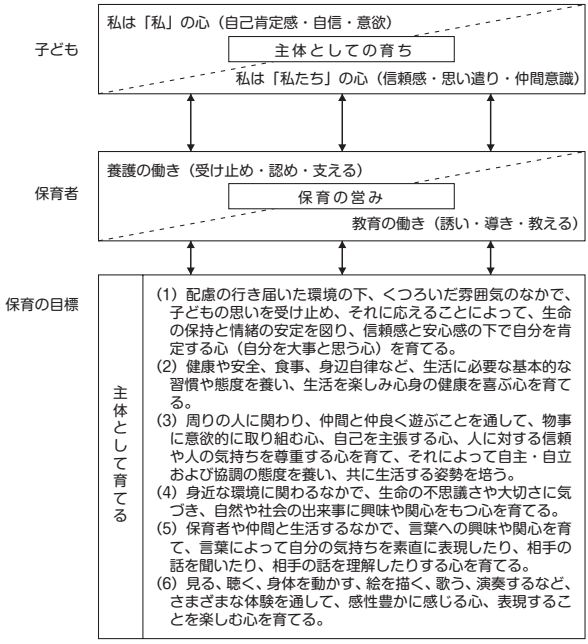

図5．養護と教育の働きが一体になったものが保育の働きである

最後の図５は、ちょうど今日の議論をまとめるのに都合がいいと思って、『保育・主体として育てる営み』という本から引いてきたものです。最後にこの図５を説明して私の話を終わろうと思うのですが、まず、「子ども」の長方形の中心部に、「主体としての育ち」という書き込みがあります。それを斜めの対角線が横切っていて、左上側が「私は私」の心、つまり自己肯定感、自信、意欲というような中身を示しています。そして、点線の右下側は「私は私たち」の心、つまり周りを信頼し、周りを思いやり、仲間意識を培っていくような心を示しています。子どもの中に、そういう主体としての心の育ちが宿ることが保育の基本的な目標だというのが、まず言いたいことです。

そして、子どもの中にそういう主体としての両面の心の育ちを生み出していくためには、それに対応して、保育者の働きにも両面が必要になってきます。保育者に関わる長方形の中心部は「保育の営み」を表し、それを二分する対角線の左上側は「養護の働き」、つまり受け止め・認め・支える働きを示しています。これは子どもの内部に「私は私」の心が育つ上に欠かせない働きです。しかし、保育の営みは養護の働きだけでは不十分です。そこで対角線の右下は、誘い・導き・教える「教育の働き」を示しています。これは子どもの「私は私たち」の心の育ちに対応しています。つまり、子どもの心の中に「私は私」と「私は私たち」のやじろべえが育つためには、皆さん方の保育の営みの中に、あるいは家庭の子育ての営みの中に、やはりこの養護の働きと教育の働きの２面がなければいけないというのが、この図５の上部分の意味です。

このように、「私は私」と言えて、なおかつ「私は私たち」と言えるように、こどもが主体として育ることが保育の根本目標なのです。それが、図５の左の欄に「主体として育てる」と掲げられている理由です。しかし、それはあまりにも大きな目標ですから、これまでの指針や要領に書かれている保育内容を私なりに読み解いて、それを下位目標として並べてみると、図５の下側に示されているように書き換えることができるのではないでしょうか。

従来は教育という枠組みの中で、健康・人間関係・言葉・環境・表現という五領域が取り上げられ、保育所保育指針ではそれにプラスして、養護の領域として生命の安全と情緒の安定という二つが挙げられてきました。つまり、保育所では七つの領域、幼稚園では教育の五領域を掲げているわけですが、そのように養護と教育を領域として分断することは、養護の働きと教育の働きが一体

という考え方に反すると私は思っています。そこで、従来の保育内容をもう一度再整理して、主体として育てるという大きな目標の下位目標として掲げたのが、（1）～（6）です。

これは今、従来の保育内容を心を育てるという観点から整理しなおしたものと考えていただければよいでしょう。読み上げると次のようになります。

（1）「配慮の行き届いた環境の下、くつろいだ雰囲気のなかで、子どもの思いを受け止め、それに応えることによって、生命の保持と情緒の安定を図り、信頼感と安心感の下で自分を肯定する心（自分を大事と思う心）を育てる」。

この（1）は子どもが小さいから必要だとか、年長だから必要ではないということではなく、どの子どもにも等しく当てはまると思います。このように、子どもの心を育てるという大きな目標を持ちたいと思います。

（2）「健康や安全、食事、身辺自律など、生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、生活を楽しみ心身の健康を喜ぶ心を育てる」。これは従来は保育内容「健康」に書かれてきたことを私なりに書き直したもので、健康というとすぐ体を鍛えるとか、乾布摩擦をするとか、いろいろなことを持ち出すのですが、そういうことではなく、病気は嫌だ、健康であるということは嬉しいことだという子どもなりの心を育てていってほしいというのが（2）についての私の願いです。つまり、病気のときは嫌だった、病気が治って保育所に出てきたら嬉しかったというように子どもの心に目を向けて、「やっぱり病気が治るとうれしいでしょう。病気しないようにしようね」と子どもに働きかけていく必要があるのではないでしょうか。こういう態度や気構えを小さいときから身に付けていってほしいと思います。健康というとすぐ体を鍛えることを考えがちですが、そういう話ではないということです。保育に携わっている人たちは、もっとこういう方向でいろいろ知恵を出して考えていかなくてはいけないのではないでしょうか。

（3）「周りの人にかかわり、仲間と仲良く遊ぶことを通して、物事に意欲的に取り組む心、自己を主張する心、人に対する信頼や人の気持ちを尊重する心を育て、それによって自主・自立および協調の態度を養い、共に生活する姿勢を培う」。これまで教育という枠組みでくくられていた５領域の「人間関係」は、本来はこういう書き方になるべきではないでしょうか。領域「人間関係」では、すぐ「人間関係を育てる」と考えてしまい、だから「ルールを守って遊ぶ」こ

とや、「あいさつをする」ことなど、そういうことを教えていけば人間関係を育てることになるのだと考えてきたのでしょう。しかし、本当に人間関係を育てることに繋がるのは、子どもが周りの人と気持ちよく過ごす気持ちになるように持っていくことでしょう。ですから、自己主張もできなくてはいけません。しかし、周りの人の気持ちを尊重する気持ちも育てていかなければなりません。そのように、人間関係の中で心を育てていくことがポイントのはずです。これまで「私は私」の心と「私は私たち」の心の両面を育てることが大事と述べてきたことが、まさにこの「人間関係」に関わることで、これには養護の働きと教育の働きの両方が必要なのであり、だから、これを教育と括って、養護と切り離すことに反対しているのです。

（4）は、環境のところで述べられていることと、あまり大差がないので省略します。

（5）「保育者や仲間と生活する中で、言葉への興味や関心を育て、言葉によって自分の気持ちを素直に表現したり、相手の話を聞いたり、相手の話を理解したりする心を育てる」という目標で、これは従来の領域「言葉」に対応しています。領域「言葉」というと、すぐ絵本を読ませるとか、文字に興味を持たせるとか、文字を教えるとかを考え、それに向けて保育を考えればよいということになりますが、保育の中で言葉というのは、むしろ人間関係や表現などと密接に結びついたものだということをここで言いたいのです。

（6）「見る、聴く、身体を動かす、絵を描く、歌う、演奏するなど、さまざまな体験を通して、感性豊かに感じる心、表現することを楽しむ心を育てる」。これは領域「表現」というところで述べられていることに対応しますが、「表現」というと、すぐ絵を描かせる、歌を歌わせるというところにもっていかれてしまいます。しかし、体を動かすことも表現であり、思いっきり鬼ごっこを楽しめることも表現ではないでしょうか。そういう観点がないのはおかしいと思って、この文言が書かれています。そして、何よりも表現することを楽しむ心を育ててほしい。表現というとどうしても結果を重視して、合奏が揃ったとか、実物に近い絵になったとかというところで表現を考えようとしますが、そのような結果ではなく、あくまでも表現のプロセス、それに伴う子どもの心の動きを重視し、こういうふうにいろいろな表現ができることを子ども自身楽しむ心を育てていってほしいと思います。このことが、結局は主体としての「私

は私」の心と、「私は私たち」の心を育てることにつながるのです。

図５に見るように、大きく「主体として育てる」という目標を掲げておいて、下位目標としてこの六つを掲げると、０歳の子どもから就学前までの子どもを視野にいれつつ、幼稚園か保育所かに関係なく子どもの育つ目標と考えていけるのではないでしょうか。

９．一人ひとりの心を見る

これまでの議論をまとめると、現在はどう見ても養護の働きが弱く、教育の働きが前面に出て、させる保育、頑張らせて褒める保育、保護者に見せる保育に流れていっているように見えます。そして、子ども一人ひとりの心がおざなりになっていると思います。今年、各保育士さんたちは初めて要録を書くことになりました。そして書こうとしたときに、気になる子どもや可愛いと思っているこどもについては、普段からよく見ているので、さっと要録を書くことができたでしょう。ところが、中が抜けるのです。そこそこ集団の流れに乗ることができ、聞きわけも良くて、あまり目立たない子どもについては、いざ書こうとしたときに、書くことが思い当たらないという現実にはたと気が付いて、愕然としたという話を、多くの保育士さんから聞くことができました。要録を書いてみて初めて、やはり保育は子ども一人ひとりだったと思ったと述懐されていましたが、そのとおりです。

やはり一人ひとりの心の動きを見ていないと、要録を書くことができません。ですから、要録を書くことにはいろいろな疑問も述べられましたが、要録を書くということは、保育はやはり子ども一人ひとりなのだというところをもう一度再認識する上で、よい試みだったのではないでしょうか。要録の問題を考えても、やはり子ども一人ひとりの心の育ちに皆さんの目が向いていってほしいというのが本日の結論です。どうもご清聴ありがとうございました。

参考文献

鯨岡峻　『ひとがひとをわかるということ』　ミネルヴァ書房　2006年